シュトゥットガルト　トリック　フィルム国際映画祭の報告　その２

“小さなスタジオ”を支える壮大な環境

有原誠治

ドイツのシュトゥットガルト・トリックフィルム映画祭（4･28～5･2）に「アンゼラスの鐘」を携えて参加した私たち（伊藤叡虫プロ社長、浜辺行正「アンゼラスの鐘」を支援する長崎の会と有原）は、その好機を活かしシュトゥットガルトの郊外にあるスタジオ・ソイ（sutdio soi）を訪問しました。これも、オフィシュ・Ｈ（アッシュ）の伊藤裕美さんの勧めでした。一時間ほどと限られた時間の中でのスタジオ訪問でしたが、実に、収穫の多い体験でした。

小さなスタジオ・・・？

スタジオ・ソイ（Studio SOI）は、映画祭の地元にある製作会社というだけでなく、創立間もないのに短編分野で国際的な賞を次々と獲得して注目を浴びています。今回の映画祭のプロダクション特集にも、日本のゴンゾ（GONZO）などといっしょに取り上げられた。そのためか、スタジオ・ソイを訪問するという私たちの計画を知った映画祭事務局が、送迎の車まで用意してくれました。なんと、映画祭のスポンサーとなったニッサンの車です。

（上の建物の中に映像制作関連企業が 40 社）

映画祭事務局に感謝しながらおよそ 20 分。郊外の萌黄色の林に囲まれた静かな住宅地の中に、茶褐色の石造りの学校のような大きな建物が現れ、車はその前で停まりました。伊藤裕美さんから“小さなスタジオ”と聞いていたので、一瞬、まちがったのではないかと戸惑ったのですが、入り口の４０社のプレートの中にスタジオ・ソイの名前を見つけて納得。ブザーを押すと、アゴヒゲの濃い若者が笑顔で迎え入れてくれました。無駄口が少なく、シャイでアニメーター特有な雰囲気をもつ彼の名は、サシュカ（Saschka Unseld）さん。私に「訪問を歓迎します」とのメールをくれた若者でした。

サシュカさんは、この建物の中には４０社のそれぞれ独立した経営の映像関連事業所が入っていて、僕らの職場は３階にあると案内してくれました。近所にある映像専門学校ＷＢＦを卒業した７人でスタジオを創立。いま４名が働いているといいながら、スタジオの部屋の前で待っていた２人の仲間を紹介してくれました。

スタジオはいくつかの部屋に分かれていて、机上にパソコンやスキャナやが置かれ、壁に絵コンテやスケッチがベタベタと張られている所は日本の職場と変わりありませんが、動画用紙やカット袋などの書類がなく、まさにデジタル時代のアニメスタジオでした。私たちの職場との最も大きな違いは、スタッフひとり一人にドアのない部屋があったことでした。

細やかな仕事、誠実な制作姿勢

彼らは、「制作している作品は短編やＣＭが中心」といいながら、自社作品のダイジェスト集を見せてくれました。作品のどれもがきめ細かな作業の積み重ねを感じさせ、誠実な制作姿勢を感じさせました。

その中の一つに、見覚えのある作品「アニーとブー」がありました。昨年の秋に、伊藤裕美さんを迎えてアニメミュージアムの会で鑑賞した作品です。駅のプラットホームで出会う若い男女の出会いをコミカルに描いた３Ｄ作品で、動きや表情がとても細やかです。眉や目や口元のひとつ一つから、キャラクターの心情が見事に伝わってきます。「ぼくらが避けている領域（表現）だね。」と、仲間と感嘆しながら見て、伊藤さんから「学生の作品です」と聞いてさらに驚いたものです。その作者のひとりがサシュカさんでした。

アニメの世界は狭い？

　その後、サシュカさんは一階別棟にある人形アニメのスタジオを案内してくれました。そこはまるで倉庫のようで、大小さまざまな人形や大道具小道具が雑然と散らばっています。彼は、近所の子どもたちをスタジオに招いて人形劇をやったばかりで、まだ片付いていないと言い訳していましたが、そのことから、子どもと地域の人々との交流を大切にしている姿勢がうかがえました。

　私は、人形アニメの撮影方法をていねいに説明してくれたアニメーターに「幼い子ども向けの作品をつくるのはとても楽しいことですね」と述べながら、「実は 20 年も昔に、ドイツの幼児向け短編テレビアニメ「ウテ・シュヌーテ・カシミール」を虫プロが下請け制作し、その打ち合わせにウィズ・バーデンにあるスタジオを、私と伊藤叡氏の二人で訪問したことがあります」と打ち明けました。すると、なんと、彼はそこに勤めたことがあると答えたではありませんか。思いがけない出会いに楽しくなりました。どうじに、どこに行っても“アニメの世界は狭いなぁ”とも思いました。

（写真はスタジオの人形のキャラクターたち）

おどろきのスタジオ環境

　この映像制作関連の事業所が集積している施設は、私たちの予想をはるかに超えて大規模なものでした。スタジオ・ソイがある３階建て石造りのビルの裏手には広い空き地があり、さらにそれを囲むように平屋の、あるいは２階建ての建物が連なっています。

　サシュカさんに聞くと、そのすべてが映像制作に関連するスタジオや施設で、コンテンツ制作を大切にするバーデン・ヴュルテンベルク州の支援によって作られたといいます。

（裏手にある映像関連施設）

　しかも、この近所に同州立フィルムアカデミー/アニメーション・ビジュアルエフェクツ・デジタルポストプロダクション・インスティート(Filmakademie Baden-Wuettemberg/Institut fur Amnimation,Visual Effects und digitale Postproduktion　略称ＦＢＷ）があり、そこで映像制作を学んだ若者たちに職場を提供する場所になっているというのです。

　伊藤裕美さんが事前に提供してくれた資料によれば、ＦＢＷは１９９０年に設立されたアニメーションを含む４年制の映画・映像高等専門学校。在学生 400 名ほど。アニメーション学科の在校生は４０名前後、毎年１０数名の学生しか受け入れず、入学は１０倍の競争率。2001 年には学生の実習作品「Das Rad/Rocks」が米アカデミー賞にノミネートされたという実績を持ち、映像制作のスペシャリストを育てる学校と研究所を併せ持つ教育施設だとあります。

　なんという環境でしょう。美しい緑の中にアニメや映像制作を学ぶ学校と制作プロダクションやポストプロダクションが隣接して存在し、その運営を自治体が支援している。人材育成と産業支援が一体となって目前に具現化されている。日本の現実となんという違いでしょう。

　事業所相互の関係は？　スタジオの家賃と全体の管理運営費は？　自治体の支援は続いているのか？　仕事の確保は？　製作費収入は？　アニメーターの月収は？　聞きたいことが山ほどあるのに次の時間が迫っていました。

アニメ（人材育成後進）大国ニッポン

帰りの車の中で、短時間で、しかも予備知識無しに訪問したことが悔やまれました。

国際的にもてはやされているかに見える日本のアニメーションですが、人材は使い捨て。経済産業省や東京都の実態調査でも産業支援と人材育成が急務と指摘しています。が、実態は業界任せ。業界は日々量産に追われ人材育成はそっちのけで、あいかわらずより安く早く制作できる中国などへの制作依存を強めています。

スタジオ訪問の前日に、映画祭の会場でＦＢＷの学生たちが制作した作品を観た私は、その技術水準の高さに舌を巻きました。いずれも今回の映画祭のオープニング用に作られた３０秒ほどの短編でしたが、キャラクター、美術デザイン、アイディア、動き、音響、そのどの分野も斬新で“即戦力”といえるもので、“スペシャリストを育てる”というＦＢＷの目標が確実に実を結んでいると見ました。そして、今日のスタジオ･ソイを取り巻くすばらしい環境です。

窓の外を流れる風景を眺めながら、私たちの世界（日本）が、遠く遥か後方にあることを痛切に感じました。（写真は、インキューベン・センター前で、サシュカさんたちと記念写真）

州立インキューベ―ション・センター

帰国してから、伊藤裕美さんに教えてもらったのですが、スタジオ・ソイが入っていた建物は州立のインキューベーション・センター、というものだそうです。伊藤さんのメールには「一定年が過ぎると退去、あるいは賃料が上がると聞いたと思います。 どこまでも無制限で、税金の補助は受けられません。フィルムアカデミーの設備も利用できるようです。ブルースクリーンのスタジオや撮影機材、あるいはレンダリング用ＰＣなどを利用できると聞きました」と、ありました。（有）